

課題名
 稲発酵粗飼料の生産拡大と効率的な収穫体制の整備

指導対象名
 阿賀野市 耕種農家、乳用牛飼養農家

課題の選定理由

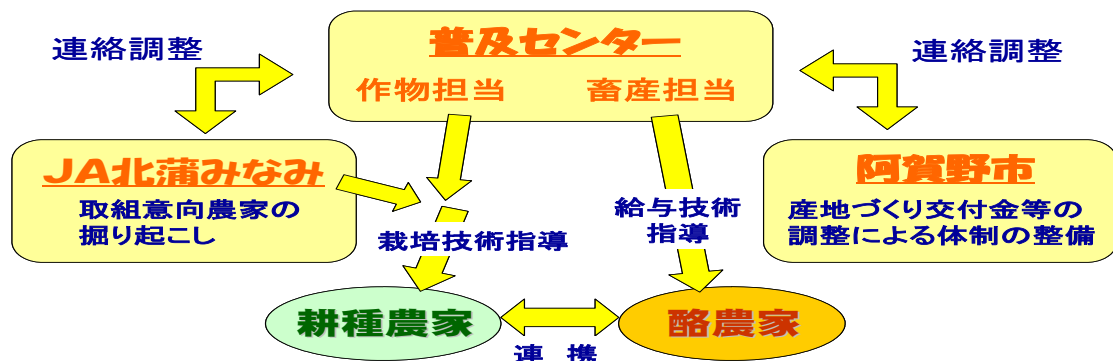
- 1 新発田地域（新発田市、阿賀野市、胎内市、聖籠町）は、67戸の酪農家が約2,700頭の乳牛を飼養し、県内頭数の3割を占める最も酪農の盛んな地域である。
- 2 また、新発田市、胎内市においては国産粗飼料の増産及び生産調整対応を目的とした耕畜連携による飼料生産受託組織（以下「コントラクター」という）が5組織存在する。
- 3 しかし、新潟県酪農発祥の地である阿賀野市安田地域の粗飼料生産は、個々の酪農家自身が栽培から収穫・調製・給与までを行う自己完結型多く、耕畜連携による粗飼料生産の取り組みは見られなかった。
- 4 平成19年度からの輸入飼料価格の高騰や生産調整面積拡大等により、阿賀野市の酪農及び稲作農家に以下の問題が発生した。
 酪農家側：自給飼料の生産拡大を図ったが、労力的な限界から必要量を全て自給することが出来ず、不足分は輸入粗飼料に頼らざるを得ない。
 耕種農家側：生産調整作物は「ダシの風」と呼ばれる強風等により、大豆栽培が困難なため、加工用米で対応するしかなく、所得確保が出来ない。
- 5 そこで、市、農協等の関係機関と連携し、役割分担を図りながら、①耕種農家による粗飼料生産組織の育成、②地元産粗飼料として稲発酵粗飼料（以下「稲WCS」という）の給与による安全・安心な牛乳生産と生産コストの低減に取り組んだ。

指導事項及び到達目標等

指導事項	指導内容	項目	現状	目標
			19年	21年
産地の構造改革に関する合意形成指導	耕種農家による粗飼料生産体制の確立	粗飼料供給組織新規育成数	0組織	1組織
高品質生乳生産拡大への実践指導	地元産粗飼料の給与による高品質・低コスト生乳生産指導	稲WCS利用農業者数	0戸	6戸

活動内容及び方法

- 1 市、農協への働きかけ
 - 阿賀野市安田地域における農業振興策として、稲WCS生産・給与システムの案を作成し、阿賀野市農林課、JA北蒲みなみに働きかけ、下記の推進体制で耕畜連携して取り組むこととした。



2 活動の経過

年度	活動内容	指導対象の変化
19	【課題の整理と提案に向けて】 ・認定農業者会安田稲作部会、畜産部会合同研修会を開催しシステム案を検討 ・取組意向農家掘り起こしに向けたアンケート調査	・耕種農家は農薬等の使用に関して疑問等があったが、概ね前向きな声が多い。 ・酪農家は生乳生産に与える影響を懸念していたが、成分等を紹介し、理解が深まる。 ・H20に向け耕種農家11名（合計5.1ha）で栽

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 耕畜連携による収穫作業体系の検討 ・ 稲WCS栽培説明会 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 増し酪農家4戸で給与する計画を策定。 ・ 耕畜連携して収穫・運搬作業を行う。
20	【稲WCS生産・給与システム検証】 <ul style="list-style-type: none"> ・ 稲WCS栽培説明会 ・ 生産拡大研修会を開催 ・ 生産拡大に向けた意向調査 ・ 成分分析結果を基にした給与指導 ・ 収穫作業等の再検討 ・ 既存の農業生産法人をコントラクターへ育成するための誘導・支援 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 耕種農家は所得確保に向け、取り組み拡大の意識が高まる。 ・ 酪農家は牛の嗜好性は良好であるが、さらに乳酸発酵の促進による高品質化を期待 ・ H21に向け耕種農家16戸(合計10.6ha)で栽培し酪農家4戸で給与する計画(うち3戸は通年給与)を策定。
21	【稲WCS生産・給与システム本格稼働】 <ul style="list-style-type: none"> ・ 新規作付者を対象にした栽培説明会 ・ 農業生産法人への収穫機械等導入支援 ・ 収穫作業体系の検討 ・ 給与拡大研修会の開催 ・ 成分分析結果を基に給与指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 既存の農業生産法人が収穫機械等を導入し、耕畜連携した作業を円滑に実施 ・ 適期収穫、乳酸菌の添加により高品質な稲WCSを確保

活動の成果

1 成果の概要

- (1) 耕畜連携により稲WCS生産・給与システムが構築され、生産拡大が図られた。
H19：0ha → H20：5.1ha → H21：10.6ha (前年比208%増)
- (2) 耕種農家は、加工用米と比較し、所得の確保につながった。
10a当たりの所得試算 (いずれも経費に労賃は含まない)
加工用米：△28,571円、稲WCS：22,734円 (51,305円増)
- (3) 酪農家は、安価な地元産粗飼料を利用することで生産コストの低減につながった。
輸入粗飼料の約3割を代替することにより、1日1頭当たり約84円の飼料費削減
→ 経産牛30頭規模で年間約919千円のコスト低減効果が期待される。
- (4) コントラクターにより、作業効率が向上し、更なる生産拡大が期待できる。

2 目標に対する達成状況

項目	現状(19年)	目標(21年)	実績(21年)	達成度
1 粗飼料供給組織新規育成数	0組織	1組織	1組織	100%
2 稲WCS利用農業者数	0人	6人	4人	67%

3 農業者等の意識と行動の変化

- (1) 耕種農家は稲WCS栽培のメリットを理解し、作付面積が拡大した。
- (2) 給与した酪農家は稲WCSを高品質な粗飼料として理解し、通年給与を開始した。

成果を上げた活動のポイント

- 1 所内のプロジェクトチーム(作物、畜産担当)でシステム案を検討し、阿賀野市、JA北蒲みなみと連携し、役割分担をして推進した。
- 2 耕種農家、酪農家の稲WCS生産のメリットについて理解を得るために研修会等で十分な情報提供を行った。
- 3 H20年度に実証ほを実施し、課題の整理、検討により、H21年度の実証ほを推進した。

今後解決を要する課題とその対応策

- 1 給与酪農家拡大のため、意向調査を行うとともに、NOSAI、酪農協、家畜保健衛生所と連携した給与指導を行い、情報提供により稲WCS＝高品質な粗飼料という理解の拡大を図る。
- 2 面積拡大に伴う収穫期間の延長に対応するため、品種構成や栽培・収穫体系を検討する。
- 3 H21生産実績を検討し、作付面積、給与酪農家拡大に伴う契約等の事務量増加に対応し、協議会等の設立を検討する。

課題の対象となった農業者の声

耕種農家：水田のままで生産調整実施が可能であり、主食用米と同様の管理で対応できるので取り組みやすい。さらに、加工用米よりもある程度の所得が確保できた。

酪農家：輸入粗飼料価格という外部要因に経営を左右されず、地元産の安全で安価な粗飼料の提供により経営の安定化が図られた。

